遺構の分布と都市の中核区

—クメール古代都市イーシャナプラの構造に関する研究 その1—

DISTRIBUTION OF THE REMAINS AND CENTRAL AREA OF THE MONUMENTS

—A study on a structure of the ancient city, *Isanapura* Part I—

下田 一太*, 中川 武**

Ichita SHIMODA and Takeshi NAKAGAWA

Sambor Prei Kuk monument is identified as *ISANAPURA* where was a capital city of *Chanla* dynasty in the 7th century. A lot of the remains such as brick shrine, moat, rampart, embanked causeway and so on were newly documented by the exploratory investigation in this ancient city. This paper discussed on the distribution of these remains and some features; the causeway extended from the temple complex to the Sen river, and moated site where conjectured as a core area of this ancient city.

Keywords: Cambodia, Khmer, Pre Angkor, Sambor Prei Kuk, Isanapura

カンボジア, クメール, プレアンコール, サンボー・プレイ・クック, イーシャナプラ

1. はじめに

東南アジアを代表する遺跡群の一つであるアンコールは、9世紀にこの王朝が成立する以前の、プレアンコール期の建築文化を素地に成立している。中でもアンコール遺跡群から南東へ約140km, カンボジア, コンボントム州に位置するサンボー・プレイ・クック遺跡群, つまり漢籍史料および碑文史料に記される7世紀の真臘の首都であるイーシャナプラに比定される遺跡群は, その規模と良好な保存状況により, 往時の建築・都市水準の高さを示す重要な痕跡である。

アンコールの造形芸術を形成する上で果たした役割, つまりインドを中心とした外来文化を受容し, その原型を保持しながらも, 将来的にクメール独自の芸術として土着化してゆく初期的な方向付けが, この遺跡群の造営を通じて図られたところは大きいものと見做される。しかしながら, その重要性に対する認識は, 未だに20世紀前半の研究成果に多くを負っている。これまでに報告されてきた遺跡群内の建築や彫像は, クメール史において重要な位置付けが与えられているものの, ここに比較的良好な状態で保存されていることが確認されつつある初期クメールの古代都市の存在により, 造形芸術の分野に限らず, 都市形成の過程や, より広範な文化背景を検証するために有用な考古学的痕跡としての史的価値を併せ持っていることが判明した。事実, この遺跡群に確認されてきた寺院遺構の周辺では, 長らく放置されてきたものの, 都市を構成していた土木事業の痕跡が一部に指摘されていた。

本研究ではこの遺跡群の全体像を改めて見直すことを目的としている。現時点で提示されうる遺跡群の全貌は, 今後の調査の進展に

より大いに刷新されゆく下図に過ぎないことが予見されるものの, 地上踏査の一連の調査結果により, この古代都市の基本的な構造が明らかになりつつある。

本稿では深い樹林の中から徐々に遺構が発見されることにより拡張されてきた遺跡群の研究史を略記した後に, 本調査により新たに記録された遺構の概要とその分布を示す。さらに都市の中核をなす寺院区と環濠に囲まれた都城地区における土木工作痕の特徴を中心に整理する。

都市の水利構造に関する水路や溜池, 堰堤といった痕跡, 都市の範囲に関する考察, そして都城から延びる古道については続稿に報告し, 本稿とあわせて古代都市イーシャナプラの全体像の素描を試みる予定である。

2. 研究史に見る遺跡群の拡張

遺跡群は1894年, カンボジア駐在のフランス人総督ルクレール (A. Leclère) の報告の中で初めて文献上に登場する。彼はブラサート・サンボー (Prasat Sambor, 本稿では以下「北寺院群」と呼称する) とその北方の祠堂, そしてブラサート・タオ (Prasat Tao, 本稿では以下「中央寺院群」と呼称する) に位置する計13基の祠堂を確認したことが窺われる¹⁾。その後, エイモニエ (E. Aymonier) により遺跡の概要が報告されるが, ルクレールによる報告の要旨を記したものである上, いくつかの点で情報が混乱している²⁾。1900年にはラジョンキエール (E.L. de Lajonquiere) により遺跡群内の部分的な調査が実施された。この調査においてもやはり北寺院群とその周辺の16基の祠堂に報告は限定されている。ここにおいて初

* 早稲田大学理工学総合研究センター 助手・工修

Research Assoc., Advanced Research Institute for Science and Engineering, Waseda University, M. Eng.

** 早稲田大学理工学部建築学科 教授・工博

Prof., School of Science and Engineering, Waseda University, Dr. Eng.

めて伽藍配置図が掲載されたものの、深い樹林に覆われていたためか祠堂の位置関係等は完全なものではなかった³⁾。1904年にはモラン(G. Morand)による調査が実施され、20基の祠堂に対して新たな番付が加えられた⁴⁾。

この遺跡群の重要性を指摘した最初の研究者は、チャンパ建築を皮切りにインドシナ全域の古建築を網羅的に調査したパルマンティエ(H. Parmentier)である。彼は1911年と1925年に当遺跡群を実査し、それまでの遺跡群に対する認識を改め、「原初(Primif)」と称される新たな建築様式の区分を提案する上でその解明の鍵となりうる極めて重要な大規模遺跡としてこれを位置づけた。1911年の調査では、森林を切り拓く踏査が実施され⁵⁾、この調査により発見された碑文は、プラサート・イエイ・ポアン(Prasat Yeai Poeun, 本稿では以下「南寺院群」と呼称する)を七世紀初頭の王、イーシャナヴァルマン一世の治世期の遺構に位置づける証左となった⁶⁾。この碑文を解説したフィノ(L. Finot)は、後にこの遺跡群をイーシャナヴァルマン一世の首都であるイーシャナプラに比定することに疑う余地がないものと言及するが、これを追求することはなかった⁷⁾。パルマンティエは1925年の調査においても、複数の祠堂を発見した。それらの調査成果は遺跡群内の遺構の目録的な記録を含む『原初クメール建築(L'art khmèr primitif)⁸⁾』において整理され、ここに合計72基の祠堂が報告された。この中で、彼はバン・ダムナツ(Ban Damnak)とヴィル・スラッ・カエウ(Val Srah Kev)と呼ばれる土手の存在を指摘し、遺跡群の周囲に人工的な土木工作痕が残されていることについて記述を残している。さらに、遺跡群が周壁によって囲まれている可能性についても触れているものの、これを実証する根拠を得ることはできなかった。

その後、彼は1927年に行われたゴルベウ(V. Goloubew)による発掘調査⁹⁾により明らかになった事実を自身の報告に補足している¹⁰⁾。この発掘調査は翌1928年にもフォンベルトウ(M. Fombertaux)により継続されたが、パルマンティエはその結果については報告を受けなかったようである¹¹⁾。パルマンティエが達成したこれら一連の研究成果は、実証的な手法をとるものとしては、既往研究の中で最も充実した記録を残すもので、ここに示された遺跡群の全体像がこれまでに更新されることはなかった。

この遺跡群に都城の痕跡を発見したのはゴルベウである。彼は1937年にテラソン(M. Terrassan)と共に遺跡群上空において2km四方の環濠の痕跡を確認し¹²⁾、翌1938年には航空写真の撮影を行った¹³⁾。彼はこの環濠に囲まれた地区をイーシャナヴァルマン一世の治世期に造られた古代都市であると推測したものの、詳細な調査に及ぶには至らず、その後この地域を調査する研究者もまた現れなかった。

その後、セデス(G. Coedès)は遺跡群から発見された碑文を再読解し、多くの碑文史料を整理、再解釈した¹⁴⁾。ここにおいて、彼はイーシャナプラと呼ばれる都城はフィノが記したように北寺院群、中央寺院群、南寺院群やその近傍の祠堂群によって構成される地区ではなく、ゴルベウの推察と同様に空中調査によって確認された環濠地区に相応するものであった可能性を指摘した。

当遺跡群におけるその後の研究には、1960年代のグロリエ(B.P. Groslier)による考古学的発掘調査や、ベネスティ(M. Benesti)による図像学的研究、ジャック(C. Jacques)、オズボーン(M. Osborne)、ビッカリー(M. Vickery)らによる金石学的研究があ

る。これらの研究はいずれもパルマンティエにより示された「寺院群遺跡」という全体像に対して重層的な史的解釈を加えるものであったが、この枠組みを超えて論じられることはなかった。

3. 踏査の方法

近年撮影された航空写真¹⁵⁾にも、ゴルベウが確認したものと同様の環濠の痕跡が認められる。本研究ではこの環濠の内外における考古学的な痕跡を確認するために踏査を実施した。同地は雨季には冠水し、密林に覆われている地域も含まれていることから、必ずしも十分な踏査が行われていない地域もある。基本的に環濠内では面的な踏査を行ったが、環濠の周囲では、住人からの聞き取り調査に基づく踏査を実施したに留まることから、今後の調査によりさらに新たな痕跡が発見されることが予想される。

踏査にあたっては、空中写真を高精度GPSを用いてジオリファレンスし、緯度経度30秒の範囲を一枚に収めたナビゲーションマップ90枚を作成し、これと併せて携帯型GPSを用いることで正確かつ効果的なグランドトゥールーズ、および確認された考古サイトの記録を実施した。また、発見された遺構の多くは深い茂みに覆われているため、本調査団が組織した地元住民よりなるメンテナンスチームにより順次それらをクリアランスし、詳細な記録を行った。

遺跡群内の遺構は、パルマンティエによりC(1~7)、N(1~24)、S(1~13)、Z(1~6)、T、U、V、W、Yにそれぞれ番付されていた。この他、一般的にK(1~8)、L(1~7)と番付されているローバン・ロミアス(Robang Romeas)寺院群がこの遺跡群には含まれる。本研究では、新たに確認された遺構が多数に及んだため、既に番付されていた遺構を含めて、便宜的にMを冠した通し番号で全遺構を番付して報告する。なお、2003年12月以前に確認された遺構については、北東から南西に向かって規則的に番付したが、それ以降に確認されたものについては、確認された順に番号を与えている。

4. 新たに記録された遺構の分布

パルマンティエによって記録された72基の祠堂の分布は、北はN24塔(M.12)、南はW塔(M.41)、東はN23塔(M.19)、西はプラサート・ロウゼイ・ロリエク(Prasat Rosei Roliek, M.61)によって包括される範囲を示している。また、北方にやや離れて位置するローバン・ロミアス寺院群(M.51, M.52, M.53)、南西のワット・モハー(Vat Maha, M.128)もまた当遺跡群に属するものとされる。

本踏査により、この地域内外から新たに107の遺構の痕跡が認められるサイトが記録された。パルマンティエにより報告された72基の祠堂は合計27のサイトを構成しているが、これを併せると計134サイトを数える(図1)。本稿では一つの伽藍を一考古サイトとして計数しているが、一伽藍は単独の祠堂による場合と、複数の祠堂により構成されている場合とがある。伽藍は必ずしも周壁や環濠に囲繞されているわけではないことから、付近に分布する遺構間において、それを単独の祠堂と見做すか、複数の祠堂が組み合わさって伽藍をなしているか見做すべきか判断が難しい場合もあるが、基本的には隣接して建つ遺構が方位軸に合わせて配されるなどの特徴を持つ場合に同一伽藍と見做している。複数の祠堂によって構成される複合伽藍内の各祠堂を個別に計数すると合計288基の祠堂および祠堂痕が遺跡群内には確認されたことになる。この他にも土手痕や明らか

に人為的な工作痕を示すサイトが複数確認されている。

新たに記録された祠堂は、最北端のM.128 (N12/56/4.2 E105/4/20.0), 最南端のM.114 (N12/49/22.2, E105/1/8.3), 最東端のM.133 (N 12/54/41.7, E105/6/56.5), そして最西端のM.113 (N12/49/54.9, E105/0/10.1)に分布し、南北約12.3km, 東西約12.2kmの範囲におよぶ。ただし、実際に遺構がまとまって認められるのは、南北N 12/51/10~N 12/53/40 (約3.6km), 東西E 105/0/50~E 105/2/50 (約4.3km)の範囲で、この地域内に全体の8割以上の遺構が含まれる。

これまでに記録されていた遺構の殆どが、複合伽藍である北・中央・南寺院群を中心とした地区に限定していたのに対して、新たに記録された寺院はその四方にそれぞれ分布しているが、特にその西方、後述する都城地区から多数確認された。多くの遺構は崩壊が進んでいる上に灌木に覆われているため、計画的な踏査なくして容易に認知されえないものであった。ただし、これらの考古学的痕跡の多くは地元住民の間では以前から知られていたもので、近年には盗掘の被害を受けているものも少なくない。その意味でこれらの遺構の大半は新たに発見されたわけではなく、新たに記録されたものである。

盗掘の被害を被っている遺構はその中央に盗掘坑が穿たれたまま

の状態で放置されているものもあり、それらは比較的新しい痕跡であるように見えるものが多い。住民からの聞き取り調査により、1990年代始めに組織的な盗掘があったことが確認されている。盗掘時に穿たれた堅穴の観察から、遺構の基礎構造の一部が確認されることも多い。ここでは円礫、小石、砂利、砂、煉瓦、ラテライト等の材料が基礎として使用されているのが認められるが、それらの組み合わせ方や構造は多様である。また一部の遺構では、祠堂直下に堅穴や小部屋が設けられている様子が看取される。ここには鎮壇具等が納められていたことが推測されるが¹⁶⁾、これまでの調査でそういった類の遺物が確認されたことはない¹⁷⁾。

今回新たに記録された遺構の殆どは煉瓦造祠堂の痕跡であるが、ラテライトによる構造体の痕跡も一部含む。遺構はいずれも崩壊が進んでおり、上部構造に関する情報が全く得られないものも多い。遺跡群内、計288遺構を保存状態によって分類すると、屋蓋頂部付近まで残存している遺構が16基、屋蓋半ばまで残存している遺構が16基、屋蓋下部まで残存している遺構が3基、壁体の上部まで残存している遺構が12基、壁体半ばまで残存している遺構が16基、壁体の下部まで残存している遺構が8基である。ここまでの遺構は平面

図1 遺跡群全域における建築遺構の分布

形態が判明するもので、計71基を数える。残りの遺構は全てマウンドと化しているが、その中でも壁体の一部が露出しているものは46基を数える。また、壁体が全く認められないものの、砂岩の建築構成部材が周囲に散乱しているものが63基、砂岩材は認められないが、マウンド上および付近に煉瓦ないしラテライト材が散乱しているものが97基を数える。さらに、現在ではいかなる建材も認められないものの、伽藍内にマウンド状に残存し、伽藍配置の対称的な位置に祠堂が残存しているなどの理由から、建築遺構の存在がほぼ確実であるものが11基を数える。いずれの遺構もマウンド化している堆積土砂および散乱煉瓦を除去することにより、壁体の足下ないしは基壇の検出が予想される。

5. 都城の自然地形

トンレサップ (Tonle Sap) 川の支流であり、北東から南西へと蛇行して流れるセン (Sen) 川の西岸に当遺跡群は位置する。セン川はダンレック (Dangrek) 山脈南側に源流を持ち、樹枝状に分岐した水源付近の支流域にはプレヤ・ヴィヘヤ (Preah Vihear) やニャック・ボス (Neak Bous) そしてコー・ケル (Koh Ker) といった大型のクメール遺跡の他、無数の小規模遺構が位置している。また、それらの下流に位置するサンボー・プレイ・クック遺跡群に至る河川沿いにも多数の遺跡が位置し、セン川が重要な河川交通の動脈として機能していた往時の様子が窺われる。

遺跡群付近のセン川西方には後背湿地が約2.5kmの幅で広がる。ここにはボン・チー・カーイ (Boeung Chea Kay) と呼ばれる大きな湿地帯が位置する他、その周囲は一面の水田となっている。この低地の西方には約5m高くなった台地が広がり、遺跡群の主要な遺構はこの台地上に位置している。

遺跡群全体は北から南へ向かう緩傾斜にあるが、標高10~20mの比較的平坦な土地である。水利都市アンコールにおいて、シエムリアップ (Siem Reap) 川は大局的に見れば都市全体を南流して横断する重要な自然要素の一つであるが、イーシャナプラにおいてはオー・クル・ケー (O Krou Ke) 川がこれと類似した地理的配置を示している。この川は遺跡群内の北側で二筋の小川を合流し、その下流において深さ約6mの谷底低地を走り、遺跡群内の遺構分布を二分するように南北に貫き、その南方でセン川の後背湿地に流れ出す。遺跡群を通過する地区では、この川に直行する幾筋かの堰堤らしき土手痕が確認される。現在では、この川の流量はさほど多くなく、乾季には一部干上がるほどであり、都市外部との交通の便にこの川が利用されていたことは推測しがたい。ただし、雨季には後述する都城地区の西側に滞水池を作り、乾季に入ってから長く湿地状態を保持する。この他、遺跡群周辺には降雨時に流水が発生するものと考えられる谷底低地が幾筋か認められる。

6. 都市の基本構造

オー・クル・ケー川の東岸には、複合寺院を中心に残存状態の良好な遺構が集中した地区が形成されている。この地域がこれまで所謂サンボー・プレイ・クック遺跡群として認識されてきた地域である。本稿では東西はオー・クル・ケー川から台地の東縁まで、南北は後述するアンロン・チャンボツ (Anlong Chambork) に取水される水路痕から南寺院群までの範囲を寺院区とする。ただし、例外として

M.19塔は台地の東側に位置するものの、台地に極めて隣接していることから寺院区に付属する遺構とした。

この寺院区の東方、セン川との間には後述する参道、および次稿で報告を予定している水路の痕跡が認められる他、低地内にも幾つかの単独祠堂が確認された。また、寺院区北方および南方からもそれぞれ複数の遺構が確認されている。オー・クル・ケー川の西岸には環濠に囲まれた都城地区が位置する。またオー・クル・ケー川の上流、西岸にはローバン・ロミアス寺院群が位置する他、そのさらに北方にも遺構が散在する。都城地区の西方からは、これまでのところ遺構は確認されていないが、小型の溜池が多数分布する他、多数の陶磁器片が散在する微高地も存在し、往時は農耕地および居住区が広がっていたことが予想される。都城地区の南方からは数基の遺構が確認された他、西方と同様に広い範囲に溜池が分布している。

本稿では以下に、寺院区と都城地区についてその概要を示すが、寺院区の主要な遺構については既往の報告に譲り¹⁸⁾、ここでは本調査で新たに記録された遺構の他、当該区の東側に確認される参道に焦点を絞り報告する。

7. 寺院区

遺跡群を代表する三つの大規模な複合寺院、つまり北、中央、南寺院群に加えて、幾つかの小規模な複合寺院、および多数の単独祠堂が集中する、遺跡群内でも特に宗教的なセンターとして機能していたことが推測される地区である。当地区に残存する遺構は建築・美術様式に基づけば、中央祠堂群の主祠堂を除いてはいずれもプレアンコール期に分類される¹⁹⁾。図2は寺院区に残存する祠堂の分布を示している。黒丸点は壁体以上が残存している祠堂、白抜点是一部に壁体が残存している場合もあるがマウンドと化している祠堂痕である。前述の通り、各伽藍にサイト番号を付した。伽藍内に複数の祠堂が存在する場合には、パルマンティエによる番付ないしは、パルマンティエにより番付がされていない場合には、現在一般的に呼称されている番号を踏襲し、必要に応じて補助番号を与えて各祠堂の番付としている。

寺院地区内からも新たに複数の祠堂が記録された。また、既知の遺構についても付属する周壁や溜池などの痕跡が新たに確認されたものも多い。中でも、北寺院では一辺約389mの方形平面をなす外周壁の存在が確認され、この伽藍が三重の周壁を有する遺構であることが判明した。図中、実線で示した部分については煉瓦造による周壁の存在が確実であるが、点線の部分については現時点では確実な痕跡は認められず、断続的に遺構が認められるに留まる。この伽藍は内周壁が中周壁に対して東方に偏位している上、中周壁は外周壁に対して南東方向に偏位しており、一般的にクメールの複合寺院では中央祠堂は伽藍全体の中央かやや後方に位置することと比して、特徴的な伽藍配置を示している。外周壁の存在により、M.15、M.16、M.17、M.18、M.21に番付される各祠堂が、北寺院群の伽藍内に立地していることが判明した。これらの遺構の内、M.15サイトのN.15塔とM.21塔はこの伽藍の東西の主軸線を介して正確に対称の位置に配されている。ただし、最近実施した中周壁を横断する発掘調査では、中周壁の構造に改変の痕跡が認められており、今回確認された外周壁もまたこの寺院造営当初のものであるか、否かについては今後の慎重な考察が必要である。

新たに幾つかの遺構が確認された一方で、ベトナム戦争時の爆撃を被り、既往の報告とは状態が異なる遺構も認められる。またパルマ

ンティエによりN16, N16bis, T, U, Vと番付された遺構は現在認められない²⁰⁾。

寺院区は台地上の東縁に位置するが、この東方に広がる低地には二筋の長大な直線の土盛が確認されている²¹⁾。これらの土盛の西端は北寺院群と南寺院群の東門の東側に到達していることから両寺院の参道であったものと考えられる。また、南寺院群の参道のすぐ北側にも、これと平行して走る長さ700m程の土盛が認められる。

中央寺院群の東方には明瞭な参道の痕跡は認められない。しかしながら南北の参道に挟まれて位置するバン・クラカイ・モア(Boeng Klakaic Moa)と呼ばれる矩形の貯水池(東西約250m, 南北約240m)の南西端より西方に短い土盛が、また、逆に台地側からも東方に土手が張り出していることから、南寺院群の参道が田圃の開墾により一部破壊されているのと同様に、ここでも既に大半が削平されてしまったものの、これが中央寺院群の参道の痕跡であった可能性が窺われる。中央寺院群の主軸は東西の方位角より反時計回りに1° 10'回

転しているが、これらの土盛りの痕跡は中央寺院群の東門から延びるこの軸線上に一致する。貯水池の東側に土盛痕は認められないことから、この参道は貯水池を出発点としていたようであり、中央寺院群の外周壁東門と貯水池間の約1.1kmが参道の長さを示しているものと考えられる。

この寺院区の北側にはアンロン・チャンボッにおいてオー・クル・ケー川より取水されセン川まで延びる南東方に走る約4.3kmの水路痕が存在する。北・南寺院群の参道は伽藍から2km以上東方へ延び、この水路の西側付近、北寺院群の参道は約100m西方、南寺院群の参道は約600m西方でそれぞれ消滅している。水路の東側には参道の痕跡が認められないことから、既に削平されたものの両参道は当時、この水路に直結していたことが推察される。つまり、両寺院へは水路と土手状の参道を経てセン川よりアプローチできたことになる。

都城へアプローチする経路としては、次稿に報告を予定している都城西辺中央から延びる古道もまた重要な役割を果たしていたことが推測さ

図2 寺院区

れる。ただし、この都城を築造した王に比定されるイーシャナヴァルマン一世は、中国王朝へ5回に及ぶ使節を朝貢したことが記録されており、他国との積極的な交流を目指した政治背景が推測される。セン川は往時の主要な交易路であった南海航路へと連絡可能なメコン川の支流であることから、セン川から都城へのアプローチは都市の表玄関に位置づけられるものであったことが推測される。つまり、長大な参道および複合寺院群の構築は、国家威信を明示するために都市全体の正面観を整備した様子が窺われる。

真臘は扶南を統合し、その前時代に比して内陸国家的性格を強く発現してゆくといった社会情勢が、7世紀初頭の真臘を中心とした史的背景として描かれるのが一般的であったが、そのような歴史観をブレアンコール時代の碑文を独自に再読することにより再検討する動きが見られる。特にビッカリーが近年展開している議論では²²⁾、扶南は7世紀に真臘によって併合されていたわけではなかったことに加えて、扶南の領土の一部であった沿岸地域の支配をイーシャナヴァルマン一世、バヴァヴァルマン二世、ジャヤヴァルマン一世といった真臘の統治者が行っていた可能性を指摘する。さらに7世紀前半に扶南から中国へと送られた使節が、イーシャナヴァルマン一世の使命を帯びていた可能性について言及するに及ぶ。今回確認された水路と参道の存在は、河川交流に伴う政治・経済的要因が都市計画にまで強く反映されていたことを示唆するものであり、これらの金石学的研究に基づく論考と同調するものといえよう。

また、努めて想像力を働かせるならば、この水路がセン川に注ぎ込む地域には、来訪者が係留した門前町が形成されていたことを推測しえる。事実、この地域にはコンボン・チューティアル (Kompong Chhuteal) 村という河港が位置しているが、多数の中華系住民によって構成されており、往時の中華系入殖地の名残であることが窺われる。当然、これらの入殖時期を一千年以上も過去に遡って位置づけることの妥当性については慎重な議論が求められるところではあるが、セン川を遡行してきた船が、直接水路に進入したことを想像することは地形上の制約から難しく、ここに荷揚げ等の仕事が発生したことは確かであり、この河港が歴史的な経緯を孕んでいることが推察される。

8. 都城地区

オー・クル・ケー川の西岸には、2km四方の環濠が残存している (図3)²³⁾。この環濠は東側を除く三辺に反時計回りに傾いて巡らされている。現在、この環濠は乾季の終わりには干上がるものの、雨季には満水となる。西辺の正確な長さは2.08km、北辺は2.03kmである。南辺の東端はオー・クル・ケー川に突き当たるが、やはり約2kmで、各辺はほぼ同寸となる。つまり、環濠の規模が予め決められた上で敷地が選定されたのであれば、この川に接する南辺東端の位置がその決定要因であった可能性が窺われる。環濠の三辺は正確には直行しておらず、北辺は東西の方位角より8° 20'、南辺は12° 30'反時計回りに振れており、西辺は南北の方位角より13° 10'反時計回りに振れている。

この濠の内側には低い土塁が巡らされており、城壁都市の様相を呈している。この城壁構造は既に削平されて水田と化している部分も少なくないものの、環濠は約20m幅、土塁はその基底部分において約40m幅で巡らされている (図4)。土塁の浸食とその崩土の堆積により、当初の断面構造を復元することは難しいものの、比較的良

好な残存箇所においては、環濠の深さは約1.5m、土塁の高さは1mであるので、環濠の底から土塁の上面までの比高はおよそ2.5mとなる。土塁沿いからは煉瓦やラテライト、砂岩といった組積材は認められず、また環濠を横断するボーリング調査²⁴⁾からも、護岸をなす構造体は確認されていない。ブレアンコール期の他の都城址、例えば、2世紀頃から扶南の中心地として機能したとされるアンコール・ボレイ (Angkor Borei) では煉瓦積みによる城壁が確認されている²⁵⁾他、ヴィヤダブラもしくはインドラブラに比定されるバンテアイ・プレイ・ノコール (Banteai Prei Nokor) ではラテライトチップを混入して堅固に突き固めた土盛構造が認められるのに比して、ここサンボー・プレイ・クック遺跡では環濠の掘削により生じた排土を土塁状にその内側に巡らせたにすぎず、土塁そのものよりも環濠の築造が主目的であったことが窺われる。

イーシャナブラに先立つ都城址の中には、アンコール・ボレイのように周壁の内外に環濠が圍繞されていることが報告されているものもある²⁶⁾。ここでも土塁の内側には土塁と平行する長手の窪地がいくつか連続しているように見える箇所があるが、そのような痕跡はごく一部に限られ、二重の環濠を伴う外郭構造に対する積極的な証拠は認められない²⁷⁾。

環濠北辺の東端には南流するやや蛇行した水路が連結している。この水路は雨季になると北から南へと流水が生じる。この水路の上流には幾つかの溜池が連結している他、複数の遺構が隣接して位置する。水路は環濠北辺の東端から約500m南方へ延びたところで、オー・クル・ケー川を取水源とする池に流れ込む。この池の南側からオー・クル・ケー川は再び流れ出し、環濠南辺の東端と連結してさらに南流する。つまり、都城の東辺もまた北側を水路、そしてその南方を池および自然河川によって閉じられており、四周边境が水路で圍繞されていることになる。

幾筋かの小道がこの環濠と土塁を横断しているが、それらは不規則な分布を示し、またその多くが脆弱な小道に過ぎないことから、おそらく後世に生活路として造られたものと考えられる。ただし、西辺中央に認められる環濠内外を通じる土盛の陸橋らしき痕跡については、道幅も広く堅固な構造体であり、環濠築造当初の遺構であることが推察される。この陸道は正確な構造が把握されるには至っていないものの、幅約30mに及ぶもので、環濠を横断した後、そのまま南西方向へと直線的に延びている。この土盛は途中で分岐して、一方は4.3km先でワット・モハーに付属する溜池の北東付近で消滅する。もう一方はより長大な痕跡であるが、これについての詳細は次稿にて報告する。この陸橋の存在により環濠は少なくとも西辺中央で分断されていたことになる。このことから、環濠は例えば北辺東端に連結している水路から取水し、都城の三辺を巡った後に、再び南辺東端からオー・クル・ケー川に放水するといった循環水路の構造ではなく、雨水を貯水した後は滞水状態にあったことが推察される²⁸⁾。

北辺と南辺には城門や陸橋の痕跡は認められないが、東辺をなすオー・クル・ケー川を横断し、その東岸、寺院区へと連絡するための陸橋らしき痕跡が三筋確認される。一筋は東辺のほぼ中央を横断するもので、東西の方位角からやや反時計回りに振れているが、この痕跡は不明瞭であり確実な存在を示すことは難しい。もう一筋は、それよりも約200m南方を横断するもので、時計回りに振れて走っ

図3 都城地区

ている。興味深いことに、前者の土盛の軸線をそのまま東へ延長すると、北寺院群の中心付近に到達し、また後者の軸線は南寺院群の中心付近に到達する。また、逆に両軸線を西に延長すると、川から約300m離れて交差するが、この地点にはM.77の煉瓦造祠堂痕が位置する。この祠堂痕は南北約18m、東西約14m、高さ約2mの比較的大きなマウンドであり、その上面に内壁の一部と深さ約2.7mの盗掘坑が露わにされている。現時点ではこれらの軸線方向とこの遺構の関係を類推する手掛かりを持たないが、寺院区と都城地区とを連携する上で重要な役割を果たしていた可能性が推察される。もう一筋の陸橋らしき痕跡は、南辺の土塁をそのまま東方に延ばしたものである。

都城地区内の遺構の記録はこれまでほぼ皆無であったが²⁹⁾、本調査により合計56サイト(計82基の祠堂)の存在が確認された。環濠内に確認される遺構は、寺院区に認められるような複数の祠堂が多重に求心的な配置をとる複合寺院はない。多くは単独の祠堂であるが、複数の遺構によって伽藍が構成されているものもある。二基以上の遺構によって構成されている都城内の伽藍には、M.61, M.66, M.71, M.72, M.75, M.78, M.79, M.82, M.88, M.93, M.94, M.103, M.104, M.105がある。また、周壁を有しているもの(M.75, M.103)や、環濠を有しているもの(M.89, M.90, M.99, M.108)、参道らしき土手を東側に付属するもの(M.69)も認められる。この他、煉瓦やラテライトといった建材は認められないものの、特徴的な土地起伏を示す地点も存在する。都城地区内に王宮や官衙が位置していたことは想像に難くないが、それらの建築を配した痕跡かもしれない。

図4 都城の環濠と土塁の断面図

遺構の多くは崩壊が進んでいるが、彫刻装飾の施された砂岩部材が周囲に散乱していることが多い。これらの彫刻部材の中には、編年に有用な装飾様式を示すものも含まれる。全体の遺構数に比して年代の特定できる遺物を含む遺構数が限られているが、これまでに確認されている遺物は、いずれもサンボー様式かプレイ・クメン様式を示すものであるため³⁰⁾、環濠内の遺構の多くがプレアンコール期に造営されたことが窺われる。ただし、環濠外の遺構からはアンコール期の装飾様式を示す石材が発見されることもあり、アンコール期にもなお、一部では祠堂の造営や改変が行われ、継続的にクメール帝国における重要な地方拠点としての位置付けを保持していたことが推察される³¹⁾。

9. まとめ

地上踏査により多数の祠堂の痕跡の他、環濠や参道といった都市的規模の土木工作痕の存在が確認された。発掘を伴う調査および科学的年代測定により、これらの都市遺構の構築年代や都城形成の過程についての解明が今後の重大な課題として残されているものの、既往の建築・美術様式編年に基づくならば、寺院区と都城地区という都市の中核区に分布する祠堂の大半はプレアンコール期に造営されたものであり、アンコール期に先立ち、ここイーシャナプラに一大都市が形成されていた様子が復元される。

謝辞

本調査は1998年より開始された早稲田大学理工学部建築史研究室とカンボジア文化芸術省の共同事業である *Sambor Prei Kuk Conservation Project* の調査結果の一部である。当事業は、文化財保護振興財団と住友財団より助成を受けて行われている。研究にあたっては、文化芸術省 H.E. Chuch Phoeurn 氏、Kong Bolin 氏により現地調査に要する様々な便宜を受けた。航空写真の判読、地形学的調査は久保純子女史（早大教育学部助教授）の指導および協力を得た。高精度 GPS の計測は久保幸夫氏（慶応義塾大学教授、当時）、金澤誠氏（早大技術職員）の協力を得た。現地の踏査は Hin Sophorn 氏（コンボントム州文化芸術局員）の他、本事業の調査団員である Chhum Meng Hong 氏、Meas Borarethy 氏、Seng Kompheak 氏、Chan Vitharong 氏、Va Simen 女史（以上プノンペン芸術大学卒業生）、So Sokuntheary 女史、小岩正樹氏（以上早大建築史研究室博士後期課程）、土屋武氏（日本国政府アンコール遺跡救済チーム団員）と共同で行ったものである。Robang Romeas を始め、幾つかの寺院の踏査においては Keo Kinal 氏（文化芸術局研究員）の協力を得た。また文献読解においては佐藤桂女史、山崎冬馬氏（以上早大建築史研究室博士課程）の協力を得た。故古城泰先生は本研究の進展に不可欠であった様々なヒントを先回りして遺して下さった。以上の方々に、心より感謝申し上げます。

註

- 註 1) LECLÈRE, M. Adhémar: Fouilles de Kompong Soay (Cambodge), *Comptes rendus de l'Académie des inscriptions et Belles-Lettres*, pp.367-378, 1894. 後にパルマンティエはルクレールによって発見されたのは南伽藍と中央伽藍ではないかと述べているが、遺構と記述の相関からしてこれは誤りである。
- 註 2) AYMONTIER, Étienne: *Le Cambodge: I. Le royaume actuel*, 1, Paris, Ernest Leroux, p.372, 1900.
- 註 3) LUNET de LAJONQUIÈRE, Edmond: *Inventaire descriptif des monuments du Cambodge*, Vol 1, PEFEO 4, Paris, E. Leroux, pp.225-236, 1902.
- 註 4) MORAND, George: *Notes et images pour mieux faire connaître les monuments et les arts des anciennes civilisations du Cambodge et du Laos*, 2, Carqueirance, pp.17-18, 1907.
- 註 5) PARMENTIER, Henri: Complément à l'inventaire descriptif des monuments du Cambodge, *BEFEO*, 13, pp.1-63, 1913.
- 註 6) FINOT, Louis: Notes d'archéologie cambodienne, *BCAI*, pp.184-189, 1912.
- 註 7) FINOT, Louis: L'archéologie indochinoise (1917-1930), *BCAI*, pp.40-41, 1931.
- 註 8) PARMENTIER, Henri: *L'art khmèr primitif* (2 Vol.), Paris, PEFEO 21-22, 1927.
- 註 9) GOLOUBEV, Victor: Chronique. Sambor Prei Kuk, *BEFEO*, 27, pp.489-492, 1927.
- 註 10) PARMENTIER, Henri: Complément à l'art khmèr primitif, *BEFEO*, 35, pp.1-116, 1935.
- 註 11) フォンベルト氏は発掘調査の結果を示す報告を残さなかったが、EFEO 本部のアーカイブに所蔵される当遺跡群の古写真には、1928年のメモ書きがある写真が数点確認される。
- 註 12) GOLOUVEV, Victor: Chronique. Cambodia, *BEFEO*, 37/2, p.655, 1937.
- 註 13) GOLOUVEV, Victor: Chronique. Cambodia, *BEFEO*, 38, p.442, 1938.
- 註 14) CÉDÈS, George: Études Cambodgiennes, *BEFEO*, 43, pp.1-16, 1943-46, *Inscriptions du Cambodge*, Vol.4, Paris, E. de Boccard (Collection des texts et documents sur l'Indochine, 3), pp.3-35, 1952, *Inscriptions du Cambodge*, Vol.5, Paris, E. de Boccard (Collection des texts et documents sur l'Indochine, 3), pp.191-194, 1953.
- 註 15) 調査に用いた空中写真は主に 1992 年に Finnmap によって撮影されたもので、遺跡群は写真番号 R36S48-8806 を中心とした地域に分布する。また 1958 年に撮影された空中写真も補足的に使用している。
- 註 16) イーシャナプラ前代の真臘の都城として位置づけられることのある、ラオ

ス、チャンパスサックのシュレスタブラにおいては、未盗掘の煉瓦造祠堂の直下から同様の小部屋ならびに多数の鎮壇具が発見されている。(SANTONI, Marielle et al.: Excavations at Champassak and Wat Phu (Southern Laos), in Ciarla, R. and Rispoli, F. (ed.), *South-East Asian Archaeology 1992*, Instituto Italiano per l'Africa e l'Orient, pp. 233-263, 1997).

- 註 17) これまでに本調査隊は南寺院群および北寺院群内の祠堂、S1, S2, N1, N7, N8, N11 塔室内において、埋め戻された盗掘痕を再度発掘し、室内に当初安置されていた台座片を探索する考古学調査を実施しているが、創建時の遺物は確認されていない。(下田一太, 中川武, ソ・ソクンテリー: サンボー・プレイ・クック N7 塔室内の基礎構造 プレアンコール期クメール建築の研究 (X), 日本建築学会大会論文梗概集, pp.533-534, 2004.)
- 註 18) 遺構の建築学的記述については前掲書註 8 に詳しい。
- 註 19) 中央寺院群の造営年代は、その主祠堂の美術史的様式編年に基づくもので、8c 後半ないしは 9c 前半に位置づけられている (STERN, Philippe: *Le style de Kulen (décor architectural et statuaire)*, *BEFEO*, 38/1, pp. 111-149, 1938, CORAL-RÉMUSAT, Gilberte de: *L'art khmer - Les grandes étapes de son évolution*, Paris, Études d'art et d'ethnologie asiatiques, 1940)。ただし、2004 年より開始された北寺院群内の発掘調査では、複数箇所において増改築の痕跡が確認されており、それらの改築は当寺院の宗教的再興が起こったとされる 10 世紀に位置づけることができそうであることから、各寺院内部においても歴史の変遷があることについて注意が必要である。
- 註 20) T, U, V の三遺構は西面に開口するオー・クル・ケー川近傍の遺構であるとされている。しかしながらパルマンティエ自身もそれら 3 基については実査しておらず、アシエ (M.Assier) によって記録されていた報告を示したに留まることから、アシエの誤報である可能性もある。
- 註 21) 下田一太, 中川武, 土屋武: 第 2 次ソムボー・プレイ・クック遺跡群調査 プレアンコール期クメール建築の研究 (II), 日本建築学会大会論文梗概集, pp.303-304, 2000., 古城泰, 久保純子: カンボジア中部, ソンボープレイクック遺跡 (7 世紀) の調査 - 1998・1999 年度調査より -, 早稲田大学大学院教育学研究科紀要, 13, pp. 15-31, 2003.
- 註 22) VICKERY, Michael: What and where was Chenla?, in Bizot, F. (ed.), *Récherches nouvelles sur le Cambodge*, Paris, EFEO, pp.197-212, 1994, *Society, economics, and politics in Pre-Angkor Cambodia, The 7th-8th century*, Tokyo, The Toyo Bunko, 1998.
- 註 23) 図 2 に記されている等高線は航空写真の立体視による比高と、リアルタイムキネマティック GPS により測位した幾つかの標定点を基に作成したものである。立体視では樹冠の高さを捉えてしまうことから、森林地区 (図面内 bush) エリアにおいては必ずしも正確な地表面高を示していない可能性がある。また、図化精度は 20m メッシュの交点でのモデル化であることから、環濠や小川などのそれよりも小さい範囲の起伏形状は捉えられていない場合がある。
- 註 24) ボーリング調査は検土杖によるもので、環濠の西辺で行った。
- 註 25) アンコール・ボレイの城壁は、煉瓦積みをも最内核としてその周囲を煉瓦の端材によって包み、さらに煉瓦の一枚壁によって表面を整える "coreveneer" と呼ばれる建造技法により構築されている。(STARK, Miriam et al.: Results of the 1995-1996 archaeological field investigations at Angkor Borei, Cambodia, *Asian Perspectives*, 38 (1), pp.7-36, 1999.)
- 註 26) 前掲書註 25
- 註 27) セデスはイーシャナプラにおいてゴルベウの発見した環濠が二重であることを記しているが、その根拠については触れられていない。(CÉDÈS, George: *Inscriptions du Cambodge*, Vol.4, Paris, E. de Boccard, Collection des texts et documents sur l'Indochine, 3, pp.3-35, 1952.)
- 註 28) 現在も環濠内のほとんどは滞水状態にあるが、南辺ではそのほぼ中央から環濠を外れて南東方向に流れ出している。ただし、この水道は途中で細かく蛇行していることもあり、後年に自然発生したものと考えられる。
- 註 29) 前掲書註 8 に報告されている遺構の内、ブラサート・ロウゼイ・ロリエクのみが環濠内に位置する。
- 註 30) 様式編年の可能な石製遺物を擁する遺構は M.50, M.80, M.83, M.86, M.93, M.99 である。
- 註 31) 当遺跡群と周辺の遺構から発見された碑文を基にした金石学的研究では、アンコール期に入ってから当遺跡群が学術的な中心地としての重要性を維持していたことが指摘されている。(OSBORNE, Milton: Notes on early Cambodian provincial history, Isanapura & Sambhupura, *France-Asie*, no.20(186), pp.433-449, 1966).

(2005 年 7 月 8 日原稿受理, 2005 年 12 月 15 日採用決定)